
変態親父輪舞曲

マゴヲ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変態親父輪舞曲

【Nコード】

N5557D

【作者名】

マゴラ

【あらすじ】

日々変態的な研究を続ける変態ロリコンマッドサイエンティスト『五十嵐御眼我』。いたって普通であろうと本人は思っているが実は常人の斜め上を行っている高校生『五十嵐御天』。一家の権力をその手に掌握する最強小学生『五十嵐さくら』。破滅的に常識から逸脱した一家が織り成す、（主に御目我が）気持ちの悪い日常が今日も始まる。

第一幕：朝、変態の目覚め

「おはようさくら。あと汚点息子」

五十嵐家の大黒柱、御眼我おめがは、台所に入るなり、とんでもないことを口にした。その暴言の矛先は、台所に立って妹のさくらと一緒に朝食を作っている御天みてんに向けられている。

「おはようクソ親父」

味噌汁に入れる葱を刻んでいた御天は包丁片手に振り向き、今にもその包丁で父親を刺し殺そうとしているかのような異常なまでに冷やかな表情で御眼我を一瞥し、そして華麗な暴言返しを行って、再び葱を刻む作業に戻った。

「おはようお父さん」

小学校四年生のさくらは、同時に目玉焼きを三個焼きながら振り向き、少し眠そうな表情で御眼我の方を見ながらいたって普通に返事をして、再びフライパンに向き直る。

「お兄ちゃん。もうちょっと丁寧に細かく切ってよ。あと味噌汁沸騰してる」

「む……。スマン」

器用な小学生の妹が、不器用な高校生の兄に料理を教えるその姿は、何とも微笑ましい光景である。普段は朝ごはんはさくらが作る約束になっているのだが、今日は御天の気まぐれで料理を手伝うことになったのである。が、やはり普段料理をしない御天が足を引っ張っている感否めない。

一人蚊帳の外に置かれている事を不服に感じた御眼我は、頬を軽く搔いた後、二人のほうへと近寄っていく。なによりもさくらと御天が親しそうにしていることが気に入らない。

「貸してみる汚点息子よ。さくらの横という聖域はお前には似合わない」

「黙れ刺し殺すぞ変態親父」

「刺せるものなら刺してみろ汚点息子。お前が逮捕されていなくなったら私はさくらと共にラヴラヴ生活を満喫できる」

「小学校四年生の血の繋がった娘を性的な対象として見るなペドフィリアめ」

こんな罵り合い、この五十嵐家においては日常茶飯事である。

御天と御眼我の不仲は、傍から見るとまるで二人が親子なのに遺伝子レベルで嫌悪し合っているというレベルのものである。最初は一方的に御眼我が御天を罵り、そして御天は自己防衛として父親を罵るようになった。

と言っても、表面上は険悪でも内面はお互いに友達同士でふざけてどつき合い罵り合いをするような感覚であるゆえ、ある意味ではなかなか良い関係なのではないだろうか。

またいつもの恒例行事が始まった、と、さくらは二人のほうを見向きもせず黙々と朝食を作り続ける。

「あたっ、指切った」

「ふはははー！ っはははは！ ざまあ見やがれ！ ついでに手首あたりを切ってそのまま死んでしまえいーっ！」

「……お兄ちゃん。邪魔するならどっか行つて。煩いからお父さんも消えて」

小学生ながらこんな環境で育ち、しかも非常にたくましく大人な精神を持つさくらは、二人を軽くあしらった。

この家の財布はさくらが握っている。つまり、この家の実質的な支配者はさくらである。御目我も御天も、さくらには逆らえない。

「す、スマン……やはり俺には料理は向かないらしい」

御天は、大人しく包丁を置いて離れてしまった。御眼我もそれに同じく。

「ククク、無能め。有能でアインシュタインの生まれ変わりとさえ言われている大天才の私の血が入っているのに何故お前はそんなに無能なのだ。そうかあれか、ロクデナシだった私の父から隔世遺伝したな？」

「何とでも言えこのサムい大人」

尋常じゃないほど常にハイテンションの御眼我の言葉を聞き流しつつ、御天は居間に移動してソファアに座り、朝の情報番組を見始めた。ごく自然に、御眼我も隣へ。

「……」

「……」

「七時半か。幼女だらけのハアハアな教育番組『お母様といっしょ』をケダモノのような眼で見ようと思うのだが」

「勝手に見るよ」

と言いつつ、テレビのリモコンは離そうとしない御天。当然、チャンネルを回す気にはなれない。御眼我にチャンネル権を与えるとんでもないことになってしまうのは目に見えている。

微妙な空気が漂う。台所からの料理をする音とテレビからの音が静寂を破っている。

「歌のお兄さんとお姉さんが変わってから何だか違和感を感じるんだ」

「知るか」

「……最近冷たいな息子よ。昔はもつとムキになって向かってきてくれたのに」

「十年くらいこんな生活してたらマンネリ化するのは当然だろ、親父」

実は御天自身、ちょっと楽しんでる風もあったりする。そんなことを外に出したら、御眼我がつけあがるのは目に見えているので、あくまでも冷静であるが。

「そうか……。新しい罵りを真剣に考えてみようかと思う。……リモコン貸して？」

「駄目だ」

「キエエエエエー！早くしないと幼女のパンチラを見逃すではないかああああーっ！MHK教育は合法的に幼女のエロが見れる唯一の局なんだぞーっ！」

「うおっ！ 暴力反対だコノヤロウ！」

五十嵐家では珍しい、御天と御眼我による、リモコンを巡る取り組み合いが始まる。

結果は、インドア派の御眼我が完膚なきまでに叩きのめされることとなるのであるが。

その後、さくらの裁量により、喧嘩両成敗で二人とも今月のお小遣い抜きが言い渡された。

第二幕：それでも俺は悪くない

御天は走るのが嫌だった。基本的に疲れるのは嫌である。

今日は朝っぱらから父親と取っ組み合いをして今日一日分くらい疲れたので、これ以上疲れるのはゴメンだった。

よって、学校が始まる八時半まで残り三分を切るという危機的状況下に置かれていても、彼は悠然と通学路を歩いていった。学校までは歩いて十五分。普段から歩いて通っている。

そもそも、御天が気まぐれて朝食を作るのを手伝って足を引っぱり、そして朝食前に父親と並んで正座させられて、妹であるはずのさくらから説教を受けてしまったので、余計に時間がなくなってしまった。

「全面的に親父が悪い。俺はいたいけな幼女が親父の毒牙にかぶりつかれてしまうのを未然に防いだだけなんだ。だから、お小遣い抜きは親父だけに……せめて俺のは半分、いや、三分の二くらいで勘弁してくれないか」

「駄目。喧嘩したらどっちも悪い。お兄ちゃん、お父さんをコテンパンにしてるじゃない。治療費のこと考えてよね？」

「正当防衛だ。親父から先に非常にキモい顔で飛びかってきたんだ。アレはキモかった。そのキモさと言ったらそれはもうさくらが卒倒してしまっただけで軽く三日くらい連続で夢に出そうなほどの尋常じゃないキモさだった。でも俺はキモ死にする危険を孕んだ親父に勇敢に立ち向かった。……それにこれくらい唾付ければ治る」

「はいはい頑張ったね。えらいえらい。……頭割れて血が出てるよ？ ひよつとしたら頭蓋骨骨折してるんじゃない？ バカ騒ぎした二人が悪いんだよ、これは。お小遣いから天引きするのは当然だと思っただけど？」

さくらは御天の武勇伝を軽く受け流し、御眼我の様子を見ながら

そう言った。

そう。御眼我の頭から現在進行形で結構な量の出血が。本当ならば救急車を呼ばなくてはならないのだが。決して、唾付ければ治るレベルの傷口ではない。

「なあ、さくら……私はいつまでこうして正座していればいい？

そろそろ目の前が真っ暗になってきて、ついでに過去の楽しかった思い出が走馬灯のように……ああ、母さんが川の向こうで手を振ってる……」

「んもうっ！ 大人なんだからしっかりしてよねお父さん！」

「いや……しっかりするにも限度と言うものが……」

結局救急車を出勤させて御眼我は病院へ。さくらと御天は時間が無いことに気づいて朝食を掻き込んで学校へ向かったわけである。

御天はやはり何も気にせずに歩いていった。頭にあるのは、どうやって今月のお小遣いを算段するか。それだけである。下手なことをしたら来月のお小遣いまで抜きになってしまう。

（やはりさくらもまだ小学生……古典的であるが、おだてまくっていい気にさせるのが一番か……？）

悶々と悩みまくる御天。まるで頭から紫色のオーラでも出ているんじゃないかというくらいの悩みぶりである。考えていることは小学生と同じレベルであるが。

（アイツも結構抜けてるところあるからな……。よし、この作戦で行こう。後はいかに自然におだてまくるかだが……）

そもそもおだてまくる時点で不自然である。そこに気づかないあたり、御天も結構抜けていたりする。

（料理を褒めるか？ アイツの料理は旨いからな。……でも今まで普通に食ってたのにいきなり褒めても怪しまれるしな……）

さくらは料理にかけては天才的である。

御天とさくらの母親が病死して一年ほど、御眼我がいわゆる“男の料理”を作って飢えをしのいでいたのだが、正直美味しくなかつ

た。その反動で当時僅か五歳だったさくらが開眼。テレビの料理番組やレシピ本で勉強し（御眼我と同じ異常な頭脳をしているため、簡単な漢字くらいならば既に読めるようになっていた）、小学校に上がるくらいには一般的な主婦を追い抜くくらいの料理の腕になっていた。

最初は御天も褒めていたが、それが日常化すると褒めることも無く、普通に黙々と食事をするようになった。今更突然褒めるのもどうかと思う。

（顔を褒めるか……？ お前よく見ると結構かわいいなとか……）
事実、さくらは可愛い。親馬鹿ならぬ兄馬鹿なのかもしれないが、そのじよそこらの同年代の子供に比べると遥かに可愛いと御天は思う。

（うーん……これは候補に上げておくか……。でもこれだけじゃあパンチが弱い……）

「いつけなーい！ 遅刻しちゃーう！」

と、悩みながら歩いていた御天が小さな交差点に差しかかるうとした時、一人の少女の声が結構近くで聞こえた。

「……え？」

そして

第三幕：曲がり角と転校生

転校生。それは必ず美少女でなければならない。

転校初日に通学路の曲がり角でぶつかり、同じクラスで尚且つ隣の席に座り、教科書が揃うまで教科書を共有することは大前提。

必ずではないが、家のお向かいに引っ越してきた方が望ましい。家の隣にツンデレ幼馴染が住んでいたりすると更に好条件である。いつか三角関係フラグが立つ事は確実である。この場合、転校生はヤンデレである可能性がある。最終的に殺されてしまう可能性がある。るので注意されたし。

なお、転校生とは実は幼い頃に結婚の約束をし合った仲で、親の転勤で離れて再び戻ってきたという可能性もある。記憶を掘り起こし、その心当たりがある場合は更に殺される可能性が高まるので、下手に刺激してはならない。

以上の注意を守って、楽しい転校生ライフを送ってもらいたい。

五十嵐御眼我著『萌える転校生理論』（自費出版）より

曲がり角から現れた少女が、御天のすぐ後ろを猛スピードで通過した。そこで曲がり、そのまま御天を追い越して駆けていく。

後姿を見ると同じ学校の制服を着ているが、見ない顔だ。おそらくは学年自体が違うのだろう。いや、友達が少ない可愛そうな学生の御天にとっては同学年であつても見たことも無い生徒も多いだろうが。

（……何だアイツは。あんなことを大声で言つて。自分が時間にルーズであるということを公言しているだけじゃないか。愚かしい行為だ。しかもトーストを口にくわえていたではないか。走りながら物を食うことはほぼ不可能であるうに。パンのカスがダイレクトに喉を直撃するではないか。そんなことも分からないとはちょっと頭

がおかしいんじゃないのか？ しかもこの時間にこの位置。間に合うわけは無いだろう。あと三十秒しかないぞ）

世の中そんな上手いこと出来ているわけじゃない。

例えばあの子が御天にぶつかって怪我したりなんかして慰謝料をたんまり請求してお小遣いに充てたりだとか。

もしくはあの子が転校生でしかも同じクラスに転校してきたりして、何故か御天の隣の席が偶然空いてたりして、そこから弱みを握ったりなんかしてそれをネタに脅して十八歳未満お断りな学園“性”活を謳歌してみるだとか。保健室至上主義。体育倉庫万歳。

そんな都合よく漫画やゲームのように世の中が進むと思ったら大間違いである。

転校生と曲がり角でぶつかる確率など、ほぼゼロに等しいのだ。

（……これじゃあ考える事が親父と同じじゃないか。危ない危ない）
跳躍しすぎていた思考を引き戻す。

何かと言って御天も御眼我に毒されている。基本的に常識的な思考が出来ないのは御眼我譲りでさくらと同じく。時折、御眼我をも凌ぐ斜め上の変態度を示すこともあったりする。しかしまだ御天には強い理性と言うものがあって、学校では浮かないように注意している分、まともな人間と言えるだろう。

「……あ、チャイム鳴った」

とりあえず学校が終わったら遅刻の最大の原因を作った御眼我を殴っておこうかと思う。自分のことは全部棚に上げて。

第四幕：天才＋バカ

「ナースさんがズボンを履いているのは非常に嘆かわしい。これじやあ治る怪我也治りやしない」

などつぶつぶつ呟きながら、救急車で搬送された三時間後に御目我は帰宅した。

頭蓋骨には何の損傷も無く、ただちよつと深めの裂傷ということと縫合はしたものの入院するまでには至らなかった。

ナースさんがズボンを履いていた。あの病院はもう駄目だ。

それが彼の今の思考の大半を占めている。頭の中で自分の理論を壮大なまでに広げているのだ。ナースさんとはなんたるかを、彼ならば辞典並みの厚さで論文に書くことも可能だ。

非常に気持ちの悪い形相でブツブツと呟きながら、居間に入る。

『お母様といつしよ』は結局見逃してしまつたが、抜かりは無いちゃんとハードディスクレコーダーの秘蔵フォルダの中にハイビジョンで録画済みだ。

「ハイビジョンで録画するとスカートやパンツの皺までクツキリなんだ。ふひひひひ」

若かりし高校生の頃、彼は大学に行かずに保育士を目指したことがある。進路相談で担任にそれを相談したところ、彼が通つていたのが有名進学校であつたことを表立つた理由としてそれを否定した。いい頭があるんだから有名な理系の大学を目指せ、と。そうじゃなかつたら高校から出さない、とさえ真顔で言われた。

しかし当然、学校から犯罪者を出したくは無いからというのが本当の理由である。彼を保育園幼稚園に入れようものなら猫に鯉節状態になることは明白だ。

当時の担任の善処のおかげで彼は科学者として部屋に引きこもる生活を強いられ、今のところは平穏な日々が続いている。

「MHK教育は疲れた私の心を癒してくれるオアシスさ」

誰に説明するまでも無い危ない独り言を言いながら、ハードディスクレコーダーを起動させる。

「ええいつ、着ぐるみの寸劇など見たくもないわっ！ サッサと少女を出さんかつ！」

「もう少しで純白の幼児パンツが見える……が、このギリギリ感がタマラン……」

「……少年もいいかもしれない……」

「体操のお兄さんも変わったんだ……いい男だったのに……それが何だこの軽薄そうな男は……こんなのが子供達を導くと思うと虫唾が走るわっ！」

御目我は独り言が激しい。テレビに向かってツツコミを入れる人間である。子供達がいるときには控えているようだが、平日の昼間はテレビが話し相手という、まるで主婦のような一面もある。内容が犯罪者のなのは何人たりとも受け入れ難いものがあるが。

「さて……今度発表する論文の続きでも書き殴るとするか」

テレビを消し、ハードディスクレコーダーの電源を切って立ち上がる。先ほどまで浮かべていた変態的な笑みはどこかに消え失せ、達観したかのような、科学者特有の気だるい表情を浮かべて居間を出て行く。

天才とバカは紙一重とはよく言ったものだが、御目我はまさしくそれを体現させている存在であると言つていい。常人から見れば精神病院へ救急搬送されてしまいそうな程の変態ぶりを発揮する御目我であるが、彼には科学者という肩書きがある。しかも変なほど優秀で、数年前に世界的な賞の受賞選考に入ってしまった経歴もある。その時には惜しくも落選してしまつたらしいが。

神の悪戯にしても悪質すぎる。何故、こんな人間としては最下層にいたような趣味を持つ男に無駄なまでに高性能な脳髓を与えたのだろうか。もっとまともな人間に与えていれば、世界平和のために

大いに役立ててくれたであろうに。

御目我にとつては、先ほどの世界的な賞を取る寸前まで行った研究でさえも、例えて言うなら鼻糞をほじりながら行ったようなものである。遊んで暮らせるだけの地位と名声と金が欲しかったがために行った研究だ。詰めが甘かったので落選しただけだ。彼が本気で真面目なことを研究したら、どれほどまで技術が進歩するかも皆目見当がつかない。

しかし、残念なことに彼の頭脳は常に“萌え”の方向へとアンテナを伸ばしてしまっているのが現実である。常に幼女だとか美少女だとか、そういうことしか考えていない。

まさしく天才だが底なしのバカ。それが御目我である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5557d/>

変態親父輪舞曲

2010年10月12日07時40分発行